4.　報告書の概要

本総括報告書には、調査データを分析した論文を収録した分析と調査票および調査データの集計表をまとめた資料の２部構成となっている。分析には、2003 年度（2004 年 1-3 月）に実施された高校生調査と高校調査、2004 年度第 1 次追跡調査、2005 年度第 2 次追跡調査、さらに 2004 年度第 1 回保護者調査が用いられている。2006（平成 18）年度に実施した高校生の追跡調査と保護者調査については、調査データのクリーニング作業が完全に終了していないため、単純集計表のみが掲載され、それを基にした論文はまだ執筆されていない。最後に、報告書に収録された研究論文の概要を述べる。

「若年者の進路と追跡（パネル）調査」（石田・佐藤博樹論文）は、若年者を取り巻く社会的・経済的環境が近年どのように変遷してきたのかをはじめに概観し、本調査の背景となっている社会・経済的なコンテクストを確認した。次に、本研究プロジェクトが実施してきた第 1 回、第２回、第３回追跡（パネル）調査および第１回、第２回保護者調査の設計・実施・回収状況について詳しく説明した。最後に、追跡調査に協力を得られた回答者の属性について分析した。高校３年生の段階で、追跡調査への協力に同意し住所を記入した生徒の属性に関しては、性別では顕著な違いはみられないが、普通科下位高校出身者の協力度が低かった。卒業後の進路に関してみると、進学予定の生徒の方が就職予定やその他（フリーター・未定を含む）よりも協力度が高かった。住所が確認でき調査票を郵送した対象者の中では、女性の方が男性よりも回答する確率が高く、普通科上位校出身者の方が普通科下位校や職業学科校出身者よりも高く、高卒後の進路予定が大学・短大の対象者の方が、進路予定が就職の対象者よりも高かった。第１回と第２回追跡調査の回答パターンをみると、１回目に回答しなかったが２回目に回答した対象者がかなりおり、長期にわたって調査を継続することにより、調査対象者と信頼関係を構築することができる追跡調査の特徴をあらわしている。

「高卒就職者の３年間―自由記述を中心として」（佐藤香・玄田論文）は、高卒就職者に焦点をあて、３度の追跡調査で収集された就業状況にかんする自由記述を中心として、３年間の初期キャリアのなかで揺れ動く心的状況を明らかにした。いわゆる新規学卒就職者が大半を占める第１次追跡調査では、教育訓練の機会などを通じて仕事を教えてもらっているという実感の有無が、職場への適応の違いとなって現れていた。離職経験者は 10%程度であるが、ほとんどが受動的・消極的な理由によるものである。非正社員が 30%を占める第２次追跡調査では、正社員は仕事に慣れてきて成長を自覚し、仕事に対してより積極的になっているグループと、慣れてきたために疑問を抱くようになったグループとに２極化していた。ただし、疑問を抱きつつも転職にいたることは少ない。また、非正社員の経験も一様ではなく、正社員／非正社員の違いというよりも、教育訓練や職場での人との関わりあいが、就業継続や仕事の充実において重要であることが示唆された。さらに、第３次追跡調査では非正社員の回答率が非常に低く、非正社員が調査に回答しにくい状況であることが推測される。教育訓練の機会が豊富にある正社員が新たなステップに挑戦しているのに対して、教育機会に恵まれない正社員では将来に対する不安が深まっており、転職に踏み切った例もあった。非正社員ではネガティブな記述が多くみられた。以上から、専門的な職業技術を身につけて就職するわけではない高卒就職者では、初期キャリアにおける教育訓練機会が重要であることが明らかにされた。

「母親の子育て方針と高校生の自信」（本田論文）は、高校生の「自信」を取り巻く諸要因の

連関構造、中でも母親の子育てのあり方との関係を明らかにした。高校生と母親のマッチングデータを使用し、高校生調査からは「自信」に加えて「家族コミュニケーション」、「対人能力」、「校内学業成績」、母親調査からは子育て方針として「内面志向」「外面志向」「達成志向」および家庭全体の所得と母学歴（教育年数）の各変数を分析に導入した。性別および学校タイプ別・性別に相関係数による分析を行った結果、高校生の「自信」は学業成績よりも家族コミュニケーションや対人能力と強く関連していること、母親の子育てのあり方はいかなる内容に重点を置いていても高校生の「自信」に対して間接的に負の影響を及ぼしがちであること、家庭の所得が高校生の「自信」と直接・間接に関連していることが見出された。

「高校生の描く将来像—30 歳時のキャリアデザイン・ライフデザイン」（元治論文）は、若年層のキャリアデザイン・ライフデザインの実態を明らかにすることを目的とし、30 歳時点での希望の働き方（「働かない」も含めて）と属性や意識との関連を分析した。分析に用いたデータは、2004 年 1 月に実施された調査のものであり、若年層をめぐる雇用環境は、回復していない状況にあった。このような状況のなかで、若者はどのような将来像を描いているのかを分析したところ、キャリアデザイン・ライフデザインは、男女ともに〔正社員〕を希望する者が多いものの、女子で〔専業主婦〕や〔パート・アルバイト〕を希望する者も多く、違いが見られた。これは、現在の働くことをめぐる男女の状況を反映したものと考えられる。また、キャリアデザイン・ライフデザインに対し、男子では、成績自己評価、予定進路、進路に関する意識、フリーターに関する意識、女子では、学校ランク、予定進路、進路に関する意識、フリーターに関する意識、親との同居に関する意識が、有意な効果をもっていた。

「価値観の再生産に関する日米比較研究—母親の子育て観と高校生の価値観」（深堀論文）は、メリトクラシーの枠組みだけでは説明することのできない日本の高校生の多様な価値観がどのように形成されているのかを、アメリカの高校生を合わせ鏡としながら、母子間における価値観の再生産の実態に注目することで明らかにした。まず日本の高校生の価値観の特徴として、地位達成志向が相対的に希薄であり、家庭生活志向・自己充足志向・共生志向が顕著であることがわかった。つぎに日本の母親の子育て観の特徴として、社会性志向は普遍的に共有されているが、地位達成志向は希薄であり、高階層を中心とする比較的幅広いグループによって支持されていることがわかった。そして地位達成志向の価値観は、会話を通して母から子へと伝達されることで再生産されている。他方、日本社会で広く共有されている社会性（共生）志向は、母親を経由せずに高校生によって内面化されている。

「専修学校専門課程『受け皿』説の再検討」（鶴田論文）は、まず短期高等教育機関の位置づけに関しては様々な知見について概観し、現時点への適応性の高い理論的枠組みはどれかを検討する作業を行った。結果、現在の専門学校には就職難の際に就職先延ばしの「受け皿」としての機能が、特に専門学科男子にとってあるということと、そのような「受け皿」としての機能と「しつけ」機関としての役割の混在が推察された。また、既存の「主体的な高卒就職離れ」、「迫られての高卒就職離れ」という概念を踏襲して、実際の希望進路が辿った経路（＝進路変更圧力の有無）と進学先（＝専門学校）への認識との間に関連があるかどうかを確認する作業を行った。結果、就職から専門学校へと進路を変更したグループに関しては、他の専門学校進学者に比べ、自ら選び取った進路という意識が薄い可能性があることが明らかとなった。

「女子にとっての短期高等教育と資格—専門学校進学者と短大進学者の比較から」（長尾論文）は、こんにち女子において専門学校進学率が短大進学率を上回っている原因は漠然と資格

志向にあると考えられてきたものの、実際の進路選択において資格取得がどの程度意識されており、結果としてどのような資格がどれだけ取得されているのかといったことは明らかにされてこなかったとの認識に立ち、女子について、①高校生の時点で専門学校と短大に進路志望が分かれる要因、②専門学校・短大2年目における資格の取得状況、の二点を検討した。その結果、資格・技術が身につくと考えれば短大より専門学校に進学しやすいこと、専門学校と短大で取得済み資格の数に有意な差はないこと、めざす資格数は短大の方が有意に多いこと、資格の種類についてはいずれも専攻と関連していること、専門学校では特殊性が高いことなどがわかった。

「若年層の抱く将来への不安」（中澤論文）は、将来について抱いている若年層の不安について分析した。景気回復が報じられてはいるものの、全体として少子高齢化の波もあり、一般に将来に対する閉塞感や不安感は強いと考えられる。こういった不安感は、個人的・心理的事象であるが、社会状況と無縁に発生するわけではない。分析から明らかとなったのは、若年層は特に将来の職業や収入に関する不安感を強く抱いていることである。また信頼度が低いから未納者が多いとされる国民年金についても、むしろ未納者に不安感が強い傾向も見出せるため、確信犯的に信頼できないから未納を選択しているという形だけでは、解釈がしにくい。また、職（失業）に対する不安は、現在の地位によって大きく異なっており、正規就業者に比して、非正規就業者、学生、非就業・非通学者のいずれもが強くなっており、収入については非正規就業者の不安が強くなっている。また、この2つに加えて、家族の介護に関する不安は、高校3年時点での家庭の暮らし向きが、依然不安のレベルを規定し続けていることにも注意が必要である。特に職業や収入といった社会経済的な地位に関する不安は、高校の在籍コース（トラック）が高卒2年後にも影響を持続しており、将来についての悩みは、実質的に職業や収入に関する不安と連動している可能性が強い。こういった不安を軽減するのは福祉制度がもたらすセイフティ・ネットであると考えられ、今後は福祉意識や政府への信頼度との関連から、不安やストレスの変数を考察することが求められる。

「福祉制度の知識と意見の表明の有無について―国民年金制度や老後の生活を中心に」（中澤論文）は、若年層が、公的年金制度に対する知識をもっているか、また、老後の生活や福祉政策に関する意見を保持しているかどうかについて検討した。前者は制度の内容についての知識の有無に関する問題であり、後者は政策意見の表明の有無についての問題である。政策意見の表明は、知識の有無と関連はあるが、必ずしも同一のものとは見なせない。特に公的年金制度の細かい内容の知識そのものは、必要に迫られたり、自らの置かれた立場や環境の中で獲得されるものであり、教育によって身につくという効果は少ないことが予想される。それに対し、政策意見の表明は、保持する情報をもとに考え、それを表に出すという態度に関わるものであり、むしろそのような態度のほうが教育歴と関連があることが予想される。その結果、年金制度については、就業者は支払っている年金保険料、学生は免除制度といった、自分たちに関連の強い事柄に関して知識が多く、教育歴の影響は見られなかった。教育ランクが高いからといって、年金制度の詳細に知悉しているとは限らない。一方、老後の生活や福祉政策に対する意見や態度については、出身高校のトラックが有意な影響をもつ。その負担を家庭や個人中心にするか、政府中心にするかという態度については、教育歴も現在の地位もほとんど関連はなかったが、どちらにせよ、意見を表明する人は進学高校出身者が多かった。つまり、政策意見を表明する「態度」の涵養に、高校の出身トラックが影響を与えていることが明らかになった。

「家族形成をめぐる若者の社会意識—結婚・家族・子ども」（諸田論文）は、若者の家族形成にかかわる意識として、結婚観、性別役割分業意識、ライフコース設計（結婚する年齢、最初の子どもを持つ年齢）に注目し、2003年及び2005年調査データを手がかりに、若者たちの社会意識の分岐状況について分析した。分析の結果明らかになったことは、①20歳前後の若者たちの結婚、家族、子どもにかかわる社会意識の「家族主義的」な「保守性」、②しかし、その「保守性」は彼らのおかれた環境や家庭的背景によって多元的な様相を示しており、③さらに言えば、彼らの「保守性」は一貫したものではないという可能性である。多元的かつ一貫していない「保守性」という問題は、若者たちの将来を生きやすくするための社会の制度設計や資源の配分ルールとその合意をめぐって、若者全般を一括りにしたプログラムを構築することの困難を示唆するものである。

「若者の公共観—国民年金制度に着目して」（白波瀬論文）は、国民年金制度の周知程度や福祉の担い手に関する若者の態度から、彼／彼女らの公共性について検討した。まず、他の年齢層との比較を通して公共観に若者独特の特徴があるのかを検討した。その結果、若者といえどもこれからの少子高齢社会において政府への期待は高く、世代間扶助として年金制度の重要性を認知していた。特に若年層だけが政府に対する懐疑心が強いわけではなかった。次に、高校卒業後の進路別に若者の中での考え方の違いを分析した。若者の中での考え方の違いは就職か、進学か、といった進路の違いよりも、一人くらしか否かといった生活の場の状況や男か女かといったジェンダー差が公共性のみかたを左右していた。その意味で、公共性とはライフステージの違いと直接連動していなかった。だからこそ公共性の意味があるのだが、若年層が特に政府や社会保障制度に懐疑的で、公共的なことに対して特に消極的であるという結果は本分析から得られなかった。

「現代若年層におけるキャリア意識の変化—高校在学時から卒業2年後にかけてのパネルデータ解析」（三輪論文）は、高校時から卒業後までのキャリア意識の変化の過程をとらえることを目的として、意識変化のパターンと、キャリア意識の決定メカニズムについて検討した。高校3年時、高卒1年目、高卒2年目の3時点パネルデータを用いて、キャリア意識の変化を対数線形モデルで、意識の規定因を修正パスモデルにより分析した。結果、(1)3時点のキャリア意識の分布は安定していること、(2)個人内意識変化は対角セルに表れる非変化効果のみで説明できること、(3)意識の性差は年齢が上がると拡大すること、(4)父学歴の効果は卒業後に顕現すること、(5)大学進学はより積極的なキャリア意識をもたらすがそれは擬似効果であること、(6)正社員として就職するとむしろ正社員志向は弱まること、などが見出された。

「大学生の退学・転学意識に関する分析」（朴澤論文）は、少子化による18歳人口の減少にともなって1990年代以降、大学進学率が上昇していると同時に退学率も増えている背景を、大学生の退学・転学意識の分析を通して考察した。大学をやめて仕事につきたいと考えている学生は2割に満たない一方、3割くらいの学生が他の大学への転学希望を持っていた。これらの意識と、家庭背景、学業成績、学生生活に関する要因との関連を分析したところ、次の三点が明らかになった。第一に、大学での成績が振るわなかったり、学内の人間関係へのコミットメントが希薄だったりする学生ほど大学をやめて仕事につきたいと考えている。第二に、豊かではない家庭出身の学生は、そうした退学意識をむしろ抱かない傾向にある。第三に、他の大学への転学を希望するのは豊かな家庭の出身者や大学の成績がよい学生、そして大学での人間関係にあまりコミットしない学生である。

「専門高校からの進学」（伊藤論文）は、専門高校から高等教育への進学について、高校３年生時点の入学手段や志望動機と入学１～２年後の学生生活や意識に注目して分析した。高卒就職の縮小と少子化の影響で増加傾向にある専門高校からの進学者の多くは学力的・経済的なハンデを抱えているが、推薦入試制度と奨学金の利用やアルバイトによって進学が可能となっていた。しかし入学後については、四年制大学に進学した者には学力的・経済的なハンデによる困難が押し寄せる。高校時代の普通科目の勉強量が不足していることにより普通科出身の学生より勉強時間が必要になり、また同時に長時間のアルバイトを余儀なくされ、成績不振に陥ったり余裕のない大学生活を送る学生が多いことが確認できた。本稿の結果からは専門高校と四年制大学との接続はうまくいっているとはいえず、彼らに対する入学前後の学力的な支援や奨学金制度のさらなる周知の重要性が示唆される。

「大学生のアルバイト時間数を規定する要因」（篠崎論文）の目的は、大学生のアルバイト時間と、親からの仕送りなどの経済状況、勉強時間などの生活環境との関係を明らかにすることである。大学生がアルバイトする背景としては、生活費や交際費の工面、社会勉強の一環など複数の要因が考えられるが、本研究では特に生活費や学費、勉強量が、アルバイト時間の量（アルバイト労働供給量）をどのように規定しているかについて検証した。大学生を対象としたパネル調査を用いた計量分析からは、(1)生活費に占める親からの仕送りの割合が高いとアルバイト量が少ないが、学費に占める親からの仕送りの割合はアルバイト量と有意な関係を持たないこと、(2)自宅（下宿）での勉強時間数や大学への出校日数などの勉強量とアルバイト量とは負の関係にある。ただ、勉強量や出校日数がアルバイト時間数に与える影響は、pooled data にトービットモデルを適用した場合、過大に推定されていることなどが明らかとなった。

高卒就職者の３年間

――自由記述を中心として――

佐藤香
（東京大学社会科学研究所）
玄田有史
（東京大学社会科学研究所）

本章では高卒就職者に焦点をあて、３度の追跡調査で収集された就業状況にかんする自由記述を中心として、３年間の初期キャリアのなかで揺れ動く心的状況を明らかにした。いわゆる新規学卒就職者が大半を占める第１次追跡調査では、教育訓練の機会などを通じて仕事を教えてもらっているという実感の有無が、職場への適応の違いとなって現れていた。離職経験者は 10%程度であるが、ほとんどが受動的・消極的な理由によるものである。非正社員が 30%を占める第２次追跡調査では、正社員は仕事に慣れてきて成長を自覚し、仕事に対してより積極的になっているグループと、慣れてきたために疑問を抱くようになったグループとに２極化していた。ただし、疑問を抱きつつも転職にいたることは少ない。また、非正社員の経験も一様ではなく、正社員／非正社員の違いというよりも、教育訓練や職場での人との関わりあいが、就業継続や仕事の充実において重要であることが示唆された。さらに、第３次追跡調査では非正社員の回答率が非常に低く、非正社員が調査に回答しにくい状況であることが推測される。教育訓練の機会が豊富にある正社員が新たなステップに挑戦しているのに対して、教育機会に恵まれない正社員では将来に対する不安が深まっており、転職に踏み切った例もあった。非正社員ではネガティブな記述が多くみられた。以上から、専門的な職業技術を身につけて就職するわけではない高卒就職者では、初期キャリアにおける教育訓練機会が重要であることが明らかにされた。

１．はじめに――高卒就職をめぐる問題

本章では、これまで三度にわたって実施してきた高校卒業者の追跡調査のなかから、就業状況に関する自由記述に着目することで、統計データに表れにくい学卒就職者の心象風景について概観する。

1990 年代から 2000 年代前半にかけて続いた不況期のなかで、新規高校卒業者（以下、「高卒」もしくは「高卒者」と略することもある）の就職状況は困難を極めた。実際、文部科学省「学校基本調査」をみると、高卒者の就職率の低下は著しかった [1)]。特に就職希望者にとって、正社員としての就業機会が大きく縮小したことから、大学、短大、専門学校などに進学することが家計の経済的制約などにより困難な場合には、いわゆるフリーターなどの非正規雇用を選択する場合もみられた（詳しくは小杉編 2002、2005 等）。さらに高校中退者や一部の高校卒業者などでは、自分に適した就職機会が見いだせないことや、自らの職業能力や就業見通しに対する不安から就業そのものを断念し、無業化するいわゆるニート状態になる場合も増えていった（玄田 2005 等）。

また卒業直前の労働市場における新規求人倍率が低い、もしくは完全失業率が高かった状況を経験した世代ほど、その後の離職率も高く、また賃金も低位に推移するという労働市場の世

代効果の存在も指摘されてきた（玄田 1997、太田 1999、大竹 2005 等）。

さらには高校卒業に就職を実現した場合においても、その後、短期間のうちに初職を離れる場合も少なくないことが指摘される。厚生労働省が雇用保険業務統計を用いた試算からいわゆる「７・５・３」とよばれるような、学卒後３年以内に離職する割合が中学卒で７割、高校卒で５割、大学卒で３割にのぼる事実が、広くメディアなどでも取り上げられた。この「７・５・３」転職自体は、不況期になってはじめて表れた現象ではなく、これまでも少なからずの高卒者は学卒後 3 年以内に転職を行ってきた [2)]。しかし、それまで長期雇用による安定的な職業機会が新卒者に与えられるのが一般的な常識と考えられていたことに、一定の見直しをもたらす契機となった。

実際、学卒後、3 年間における就職および訓練機会の持つ意味は大きい [3)]。玄田・堀田（2007）では、経済産業省における研究会が独自に実施したアンケート調査（『働き方と学び方に関する調査』2005 年 1 月実施）を用いて、就職後の最初の３年に個別指導・相談体制が整備される職場で適職体験を感じる機会を得てきた場合ほど、その後の持続的な能力向上を促進することを指摘している。

だが、そのような最初の３年間にそのような就職機会に、すべての高卒者が恵まれてきたわけではない。実際に良好な就業機会に遭遇した高卒就職者とそうでない高卒就職者で、どのような心的な相違があるのだろうか。また高校卒業直後から一定の年月を経るなかでどのような心的変化が起こっているのだろうか。そして、それが実際の職業選択にどのように結びついているのだろうか。

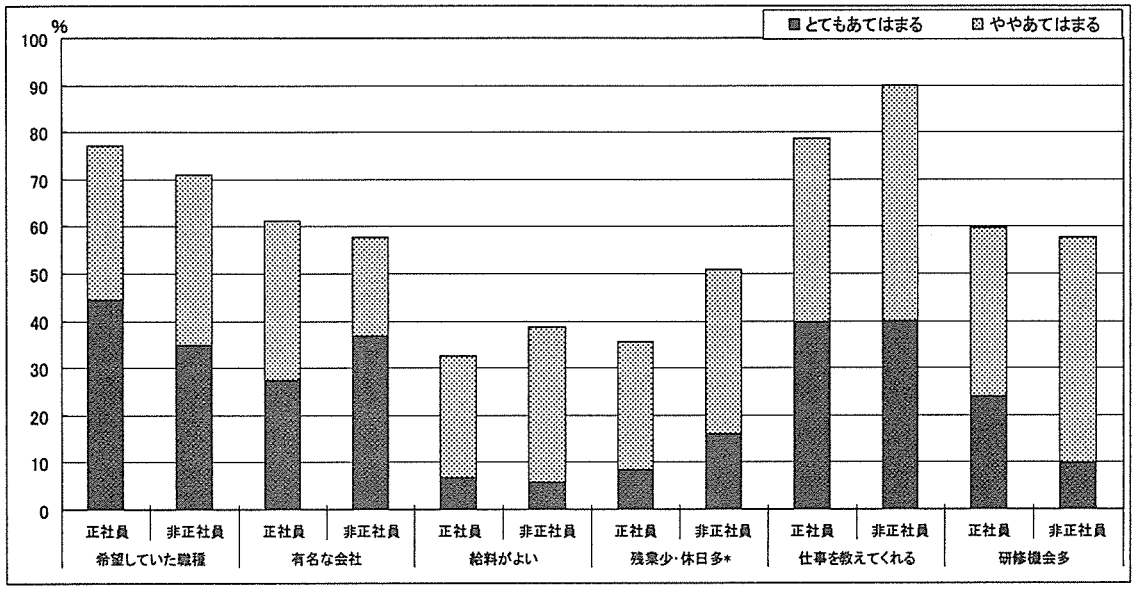
これらの主観的現実における状況とその変化を数量的に把握する方向を検討することも重要であるが、まずは当事者の言葉に率直に耳を傾けることが何より重要であろう。玄田・佐藤（2005）で指摘したように、将来の人生設計に関する高校生の意識はいっけん相異なる価値観が併存する「アンビヴァレント」な場合も多く、その状況が卒業後も継続しているかもしれないし、時には強まっているかもしれない [4)]。その本人すら整理されてないことも多い複雑な内面を知る上で、調査における自由記述の内容を精査検討することが一定の価値を有するだろう。

このことは、高卒後わずかしか時間がたっていない若年者の仕事満足度の問題とも結びつく。20 歳以上を調査対象者とする JGSS データをもちいた佐藤博樹（2002）は、短時間非正規従業員と正規従業員とで仕事満足度に違いがないことを明らかにしている。その後の JGSS データをもちいた佐藤香（2003、2007）によっても、客観的な労働条件の違いにもかかわらず、やはり仕事満足度には違いがないことが確認されている。けれども、JGSS 調査では対象とならない 20 歳そこそこの若年者にとって、しかも、さきにみたようにその後のキャリアに大きな影響を及ぼしかねない初職についても、同様のことがいえるのだろうか。

この数年、若年のフリーターやニートにかんする研究は、急速に蓄積されてきている。そのなかで、フリーター・ニート増加の原因として、社会構造的な要因とともに、若者たちの意識が焦点化された。こうした研究動向とも関連して、若者たちの意識そのものを問題視する通説も少なくない。乾編著（2006A）では、若者たちの意識に原因を求めることへの批判に立って、たとえばフリーターと失業者との社会経済的な連続性を明らかにしている。さらに、乾編（2006B）は、東京都の都立高校２校の卒業生という限定されたサンプルながら、追跡的なインタビュー調査を実施しており、高卒１年目の調査結果からフリーターと正規就業者が連続性をもって存在している状況を描きだしている。

実際、高卒3年目にあたる第3次追跡調査で就業している195名を対象として、従業先についての評価を尋ねた6項目について、正社員とアルバイト・パート・臨時などの非正社員を比較してみても、その評価には、ほとんど有意な違いはみられない（図1）。「残業が少ない・休日が多い」という、わずか1項目についてのみ有意水準 5%で、非正社員のほうが「とてもあてはまる」「ややあてはまる」とする比率が高かった。

図1　従業先についての評価



前掲乾編著（2006B）が正社員と非正社員との状況的な連続性を明らかにしたとすれば、図1にみられるのは心的な連続性であるといえるのだろうか。これまでの研究が明らかにしているように（たとえば小杉編 2002）、非正規就業者である若年者の大多数は正規就業に就くことを望んでいる。状況的に連続しているとしても、そして現在の従業先に対する評価が著しく似通っていたとしても、やはり正社員と非正社員では心的状況が異なるはずである。本稿では、その一端を自由記述から明らかにしたい。

幸いなことに、実施されている追跡調査では、自由記述にも十分な拝領をなされた設計が行われており、さらには同一回答者の経年的な心的状況の変化も観察可能であり、きわめて貴重な調査回答となっている。

ここで用いるデータは以下の通りである。

① 第1次追跡調査（高卒後半年、2004年11-12月）A票（有効回収数68）

② 第2次追跡調査（高卒後1年半、2005年11-12月）A票（有効回収数115）

③ 第3次追跡調査（高卒後2年半、2006年11-12月）A票（有効回収数195）のうち高卒就職者

本稿の構成は以下の通りである。次節では、卒業後半年後における就業経験とその時点における心的状況を正社員・公務員と非正社員ごとに概観する。第3節では1年半後における状況を、第4節ではさらに1年を経た2年半後の状況を、自由記述に着目して検討する。継続的な調査のなかには、同一回答者も含まれており、自らの就業に関する心的状況の変化を知ることができる。

2．第１次追跡調査データから

2.1　高卒から半年の就業経験

まず、初職への就職がどのようなものであったか、高卒後半年の間に、どのような就業経験をもっているかを概観しておくことにしよう。「高校卒業後に何らかの仕事に就いた経験がある」として、就職者用の調査票Ａ票に回答したのは 68 名である。内訳は、男性 30 名、女性 36 名、不明２名となっている。

このうち 62 名は高校卒業後すぐに就職している。残る６名は、「無職で仕事を探していた」１名、「(予備校を含む) 学校に通っていた」３名、「その他」２名である。高校卒業後すぐに就職した比率は男性のほうが高い。高卒女子の就職が、男子と比較して困難であることを反映しているのであろう。その後、仕事に就いた時期をみると、「無職で仕事を探していた」１名は６月下旬に、「学校に通っていた」４名のうち１名は５月下旬、１名は７月上旬、「その他」２名のうち１名は５月中旬となっている。また、２名は無回答である。

以上のように、調査時点までに、正社員であれ非正社員であれ、何らかの仕事を経験した 68 名の初職の就業形態をみてみよう。(　) 内は人数である。

正社員 63.1%(41)、公務員 12.3%(8)、自営・家族従業 1.5%(1)、非正社員 20.0%(14)、その他 3.1%(2)

就業形態と就職経路との関係をみると、正社員は 75%（30 名）が学校経由で、公務員は全員が公務員の一般公募で就職しているのに対して、非正社員の就職経路は多様である。「家族や知人の紹介」３名、「就職情報誌や新聞広告」３名、「求人ポスター」３名などとなっている。都市部では、非正社員の典型的職種としては、コンビニエンスストアの販売職などが想定されるが、ここでは、これらの職種は少数派である。

調査時点まで初職を継続しているのは 67 名中 60 名で、７名が継続していない。１名は無回答であるが、おおよそ１割が半年で初職を離職していることになる。なお、男性の離職者は１名で、離職者の大部分は女性が占める。

初職継続者が最も多いのは公務員で、全員が継続している。次いで正社員が 41 名中 37 名、非正社員は 14 名中 11 名が継続している。初職が非正社員で離職した３名のうち２名は、下記でもみるように「もともと短期の契約だった」ので、実質的には１名のみが離職したことになる。この事実については、非正社員でも努力して仕事を継続しているとみる見方と、非正社員をやめたとしても次の仕事が見つからないため離職という選択肢がとりにくいとする見方の双方がありうるだろう。そのいずれなのだろうか。

調査では、離職の理由について多重回答で尋ねている。「仕事が自分に合わなかった」３名、「職場の人間関係がうまくいかなかった」３名、「残業が多かったり休みが少なかった」２名、「もともと短期の契約だった」２名などが主な理由となっている。「もともと短期の契約だった」２名は、どちらも事務職の女性である。また、１名は「会社が倒産した」ため離職している。「他にいい勤め先があった」「他にやりたいことがあった」などの理由を選択者はおらず、消極的あるいは受動的な理由であるといえよう。この点は、バブル期の 1988 年に就職した高卒１年目の就職者を対象とした小杉（1990）とも一致する。

初職を継続していない７名のうち４名は、調査時点で就業していない。「会社が倒産した」１名は調査時点で郵便局の非常勤職員となっているが、「もともと短期の契約だった」２名および「残業が多かったり休みが少なかった」２名は非就業である。

2.2　この半年間をどう感じているか——自由記述からみた経験

2.2.1　正社員・公務員の明暗

就職して半年といえば、希望に胸を膨らませて社会に出て、ようやく仕事にも慣れる頃である。子どもの頃や高校生のときからなりたかった職業に就いて、喜びが継続しているかもしれない。あるいは、すでに胸に描いていた夢と現実とのギャップに打ちのめされていることもあるだろう。ここでは、こうした状況について、彼ら／彼女らの言葉をみていくことにしたい。（　）内はすべて調査時点での職業であり、第２次調査以降も同様である。

まず、社会人となり、その手応えに充実感を感じている記述である。

- 高校卒業後、いきなり社会人として働く事になり戸惑いを隠せなかったが、半年たった今は、この生活に慣れてきている。高校とはまったく違うが、自分の個性が出せる仕事に就けて良かった。（警察官）
- 幼少の頃から将来は接客業に就きたいと思っていましたから、今の仕事は、私にとって100%満足する仕事です。今は駅員ですが、出来れば新幹線の運転手になれたらと思っています。多くの先輩達に支えられ毎日充実した生活を送っています。（JRの駅業務）
- 親切に、指導してもらっている、早く一人前になりたい。職場になじんで貢献できるようになりたい。（水産加工業）
- 最初は不安だったけれど思った以上にできているのでよい。（メッキ加工）
- 接客業のむずかしさもありますが、出会いの楽しみもあります。（ホテル客室係）

これらの感想とは対照的に、働くことの厳しさに直面し、充実感よりも不安が先に立っている感想もある。

- 人間関係がとても難しい。複雑だということがよくわかりました。あんな言い方されたらだれだって仕事をやめたくなる。（スーパーマーケット）
- 分からないことばかりで今でも不安な毎日を送っている。誰も教えてはくれないので自分で調べるが、結局人に聞いてばかりいる。人に質問されるとあせってしまう。高校では感じなかった心細さと自身の力の無さを痛感している。（役場の一般事務）
- 仕事上で先生のようにきちんと教えてくれる人がいないので、何か自分でできるのかも分からずに失敗ばかりしている。働くことは本当に難しい。（卸売業の営業事務）

この両者の最大の違いは、仕事を教えてもらっているという実感があるか否かにある。教えてもらっていると感じることができれば、自分でも進歩していることがわかるし、教えてくれる先輩や上司への尊敬の念が生まれる。やがて、職場に貢献したことが少しでも認められたり、その職場における「一人前」がイメージできるようになったりすれば、職業意識はさらに高まることになるだろう。ホテルのレストランでサービスをしている女性は「ホテルに宿泊されるお客様の中で、外国の方が時々来られるので、英語を少しでも覚えるべきだと思った」と、仕事に対して意欲的な感想を述べている。これとは逆に、仕事を教えてもらえないと思うと、そこから人間関係についても不満や不安が生じてくるのではないだろうか。

充実感や厳しさの実感ではなく、高校時代の職業選択についての後悔の念を記述した回答もある。

・ もっと高校時代に自分のやりたいことを真剣に探せばよかった。（公務員）
・ 進路を決める時にもっと自分の将来のことをよく考えて慎重になるべきだったと思います。（機械オペレーター）
・ 自分のやりたい仕事につきたい。（ゴム製品成型）
・ 本気で高校の時に進路を考えないとあかんなと思った。今の仕事嫌。（SHOP での販売）

それでも、彼ら／彼女らは、高卒後半年以上、仕事を継続している。この点を考慮すれば、多くの場合、仕事の厳しさなどの理由からは早期の離職にいたらないようである。残念ながら、正社員からの離職者の自由記述は多くない。「就職というものは、あせってさがすものではないと思った」（マンションドア組立製造から離職）といった部分的な記述にとどまる。

すでにみたように、高卒就職者も仕事が厳しいものであることは理解している。働くということは、元来、楽しいことばかりでも苦しいことばかりでもない。両者が混在しているのが普通である。この両面に気づいていることがうかがえる言及には、以下のようなものがある。

・ 高校の時に思っていた自分の将来と今、現在の自分はだいぶ違う。働く厳しさ、お金をかせぐということの大変さを感じさせられた。半年間たっても、まだまだ、仕事はきちんと出来ない。同じ職場の先輩方のように早くなりたい。（精密機械組み立て）
・ 働いて給料をもらう事がいかに大変かわかったし給料をもらった時の嬉しさも味わえてよかった。（旋盤加工）
・ 気を使う／自分の時間が減る／つかれる／社会のﾙｰﾙ、ﾏﾅｰが身につく／働き、お金を得る大変さを知った／新しい出会いがある。（キーオペレーター）

2.2.2 正社員からみた非正社員・学生

仕事の厳しさと、それと引き換えに得られる喜びや楽しさを知った正社員を半年間経験した後、非正社員や学生に対して、彼ら／彼女らは、どのように感じているだろうか。それぞれについて、みていこう。

・ 社員は、休みの自由もきかないし、一日中仕事という感じでとても大変だというのを日々、痛感しています。フリーターがとてもうらやましくなります。（スーパーマーケット）
・ 自分が本当にやりたいことが見つからないまま、気軽に就職してしまうと危険だと思った。でも正社員はなれる人があまりいないので１回はしたほうがいいと思う。（大手在宅介護業）
・ やっぱり、社会は厳しいなあと思いました（特に人間関係）。アルバイトと正社員はちがうのが分かった。（公務員）
・ すごく嫌な言い方になってしまうけれど、大学など進学している人達は気楽でいいよなぁと思ってしまう時がある。自分は同じ年代の人がまったくいない会社で、朝も早くから仕事をして、休みもほとんどない生活を送っている。進学した方がよかったのかなぁと今でも思っている。（事務職）
・ 学生の友人に収入がいいと思われているが、仕送りをもらわない生活だとかなり苦しい。いつでも遊べる学生がうらやましい。（公務員）
・ 大人と半年間過ごして、大人の嫌な所いっぱい見えたし、こんな風になりたくないって思った。まだ学生やっておけばよかった。（金融窓口）

フリーターに対しても学生に対しても、時間的余裕がある点でうらやましいと感じている点は共通である。やはり、就職して最もギャップを感じるのは、休日を含めた自由時間の問題だろう。この点については、ほとんどすべての働く人が、なかなか思い通りにはいかないのが現実である。自由時間が少なくなっても、がんばれば給料に反映されたり、仕事を覚える楽しさで毎日が飛ぶように過ぎていったりすれば、それほど気にはならない。

けれども、乾編著（2006b）が指摘しているように、近年の高卒就職者の労働条件は、きわめて厳しくなっている。そこには長時間で不規則な勤務時間、休暇取得の困難などがあるという。しかも、研修制度などによる教育訓練の場が提供されないため、仕事に慣れ、仕事を覚えることができないだけでなく、職場内での同輩集団を形成する機会が与えられない。このような場合は、どうしても過度な労働や職場内でのトラブルが生じやすく、早期離職に結びつきやすい。仕事は技術だけでできるものではない。職場への適応を促すためにも、就職教育訓練の機会は重要である[5)]。

2.2.3　非正社員の悩み

正社員や公務員から非正社員がどのように認識されているかは、うえでみたとおりであるが、逆に非正社員は、非正社員であることや正社員であることを、どのようにみているだろうか。ここでは、その点についてみていきたい。

初職が非正社員であった14名のうち、もともとの契約期間によらず離職した１名は「高校で習ったことはあまり意味がないと思った。もっと早い段階で自分の進路を考えればよかったと思いました」と記述している。また、もともと短期契約であった事務職の女性のうち１名は次のような感想を述べている。

- 人と接することで思ったのは、女性はいつも笑顔でいなければならないのかなあ・・・と思いました。

その他の非正社員の感想は、以下のように、厳しさを知ったというものが多い。充実感をもっている正社員とは異なり、この厳しさに「給料をもらう喜び」や「仕事を教えてもらう喜び」が伴っていない点に、非正社員の特徴が見出される。仕事の場で、正社員と非正社員が混在していることの多い現在、職場環境への評価は同じでも、感じていることは、はっきりと異なっているといえるだろう。

- アルバイトで生活するのはむずかしいと思った。（コンビニ店員）
- 頭を使わないと物忘れが激しくなる。自分の存在価値が低い。（生協で夜間積込アルバイト）
- フリーターって肩書きへの世間の風あたりは強い。仕事内容は同じでも給与は半分以下だしツライ。早く正社員になりたい。（コンビニ店員・週６日勤務）
- 将来の仕事へ就くことへのきびしさを知った気がします。（事務・非常勤）

３．第２次追跡調査データから

3.1　高卒から１年半の就業経験

本節では、第２次追跡調査の回答者115名についてみていく。第１回追跡調査Ａ票回答者68名のうち、第２回追跡調査Ａ票にも回答しているのは48名である。第１回追跡調査から第２回調査にかけて脱落した20名の初職を確認しておこう。脱落したのは、第１回追

跡調査で正社員であった 41 名のうち 10 名、公務員８名のうち１名、自営･家族従業者 1 名のうち１名、非正社員 14 名のうち８名である。

第２回追跡調査から新たに回答した67名を加えた第２回追跡調査Ａ票回答者115名の性別をみると、男性 40 名、女性 72 名、無回答３名となっている。

この 115 名について 2005 年秋の就業状態をみることにしよう。（　）内は人数である。

正社員 54.0%（62）、公務員 12.0%（14）、自営･家族従業 1.0%（1）、非正社員 30.4%（35）、その他 2.6%（3）

性別にみると、男性は 75%にあたる 40 名中 30 名が正社員または公務員であるのに対して、女性では正社員または公務員であるのは 63%の 72 名中 45 名にとどまる。一方、非正社員は、男性９名、女性 26 名と、女性が男性を大きく上回っている。

高卒後１年半の間に就業状態の変化があったか否かについてみると、変化がないのは 66%で、34%は変化があったと回答している。変化がなかったと回答した 75 名について現在の就業状態をみると 71%（53 名）が正社員、15%（11 名）が公務員、13%（10 名）が非正社員である。それに対して、変化があったとする 39 名では、正社員は 23%（９名）にとどまり、64%（25 名）が非正社員となっている。

以上のように､就業状態に変化があると非正社員になりやすい傾向がみられるが､事実、正社員 62 名のうち 53 名は高卒直後の就業先を継続している。非継続者について１年前の状況をみると、正社員３名、非正社員２名、専門･専修学校３名、無職１名である。非正社員から正社員になっているのは正社員の３%にすぎない[6]。

正社員／非正社員といった就業形態にかかわらず、高卒後から就業形態が変化していない場合は、入職ルートが学校を経由している比率が高い。正社員では 53 名中 42 名が、非正社員でも 10 名中４名が学校の推薦や紹介で就職している。それに対して、就業状態に変化があった場合は、当然のことながら学校経由の入職は少なくなる。正社員９名中４名が職業安定所の紹介を利用し、非正社員では 25 名中８名が就職情報誌や新聞広告、４名が求人ポスター、同じく４名が家族･知人･先輩の紹介によって、現在の就業先に入職している。

現在の就業状態が非正社員であるものについてみると、高卒直後から同じ就業先であるのは 35 名中 10 名と、３分の１以下にとどまる。ここからも、就業状態の変化にともなって非正社員となるケースが多いことがわかる。変化があった非正社員の１年前の状況は、正社員６名、非正社員３名、４年制大学２名、専門・専修学校８名、求職中２名、などとなっている。

3.2　高卒後１年半の経験――自由記述から

3.2.1　正社員･公務員の継続就業者

ここでは、高卒後、正社員や公務員として働き始め２年目まで継続している回答者の自由記述をみていこう。

- 最初の一年は全てが初めてであっという間に過ぎたけど、二年目になると少し心に余裕ができたせいかいろいろな事を考えたり、いろいろ悩んだりして少しは成長したように感じた。（技能職）
- 私は就職して、一年半になりますが、正社員として働く事で、責任という言葉を重く捉えるよ

うになりました。以前、取引会社への振込金額を間違えてしまい、クレームが入った時は「自分のせい」という事を強く感じました。（中略）それから（これは私の勤める会社が少人数のせいもありますが）自分が言われた以上の仕事をこなせば社長から認めてもらえ、さらに責任の重い仕事を覚えていける楽しさも経験できました。（事務職）

- 仕事量が増え、社会人としての責任の重さを感じた。（公務員）
- 人よりも１歩先に出る積極性が大事。その１歩が後の自分に大きく影響する。自分にはできないと思わない。やる気があれば何だってできる。（警察官）
- 就職して２年目ですが、就職してから「もっと色々なことを学びたい」と思うことが多くなりました。（福祉関係）
- 販売業なので毎日いろんな人に接し、いろんな経験をし、視野が広がったと思います。環境に恵まれた職場だと心から思うので、日々勉強と思い、自分の力にしていきたいです。反面、自分の可能性をまた別の職種でもっと生かしたいとか試したいと最近思うようになりました。でも具体的なここまでという目標をさだめられていないので、今の仕事をやめようとは思いません。とにかくいろんなコトに挑戦して、自分を輝せることに今は専念しています。そんな風に思えるのは今の上司や周りの人の影響がすごく大きいです。（販売職）

こうした前向きの記述は、まだまだ多くある。これらの記述に共通しているのは、自分の成長を実感しているという点である。また、仕事の責任・責任感ともに増していることがうかがわれる。第１次追跡調査で「接客業のむずかしさもありますが、出会いの楽しみもあります」と記述してくれたホテルの客室係を勤めていた女性は、翌年、次のように回答している。

- 本当に充実しています。高卒でこの職に就いたときはホテル・サービス課でしたが、もともと商業高校卒だったのでフロントで会計をするようになり、益々やる気が出ました。小さいことかもしれませんが、私なりに昇進したような気がします。同僚も私をかわいがってくれて、応援してくれ、とても励まされています。１年前より本当に成長したと思います。（ホテル会計）

また、子どもの頃から希望していた鉄道員になったという回答者は、第１次追跡調査でも職業生活の充実を報告していたが、第２次追跡調査では、さらに充実したことがうかがわれる回答を記述している。

- 私の仕事は接客業の中でも最もお客様の立場をよく理解し、お客様がより安心して電車に乗られる様に毎日、新鮮な気持ちで応対しております。そして、お客様に、お礼とか、励ましの言葉をかけて頂けるのが、私が、この会社に、この仕事に、就けて、本当に良かったと思える毎日です。これからも、私の今の仕事に、誇りを持って、お客様に愛される様、頑張りたいと思っています。（鉄道員）

けれども、継続就業者の全員がこうした環境にあるわけではない。職場の現実について理解が深まり、むしろそのために不満が生じているケースもある。職場の人間関係に適応できなかったり、同輩集団が形成されず孤立していたり、長時間労働や不規則勤務に悩んでいる様子がうかがわれる。

- 会社の雰囲気自体は、そこそこ良いのだが、直接の先輩にあたる人とどうも合わなくて悩んでいる。仕事中、常に携帯をいじっている人で、それがすごく気になり、会社のとある上司に相

談をしたら、その人はここに勤めて 7～8 年経つのだから、そういう事をしてもいいのだということを言われ、すごく腑におちなかった。(中略)一緒に仕事をする気も薄れてきたので、今すごく悩んでいる。(事務職)

- 大人は汚い。上司と部下…もう、うんざりです。昔の考えや、やり方を今の時代に押しつけてもムダなのに。考えが固く、会社がダメになると思う。(販売職)
- 最近、仕事での人間関係や自分の出来なさに嫌気がさして、仕事を辞めたい気持ちです。早く結婚してしまいたいと思うばかりです。(事務職)
- 残業がないのは良いが収入が少ない。ボーナスがないに等しく楽しみがない。社員で 20～30 才の人が少なく 50 才以上（パート、アルバイトの人）の人が多く、活力に貧しい気がする。(水産加工業)
- 仕事で上司の目が気になって、仕事が終わってから会社に戻る、帰宅するのが毎日遅く、十分な睡眠がとれない。仕事の予定が次の日の分しかできていないことが多く、つらい（休みの日の予定も分からない。）(福祉関係)

自由時間の少なさも、１年目と同様に悩みの種となっている。少しずつ責任のある仕事を任されるようになると、さらに自由時間が減少することもあるだろう。前節でもふれたが、近年、正社員の労働強化が進んでおり、心身に不調をきたす例も少なくない。また、高卒者の給与水準は決して高くなく、こうした労働強化と見合うものにはなっていないと考えられる。

- 社員として働いていると、時間を縛られ、自分の大好きな事も我慢しなくてはならない時が、たまにあり、それが、嫌で何度も仕事をやめたいと感じます。人生のほとんどを仕事に費やすのは、ゴメンだと思っています。(事務職)
- 仕事は疲れるし、自分の時間が減ってしまうので、少しだけストレスを感じました。でも、頑張った分のお給料や、上司に認められた時の喜びで、やりがいも感じました。(情報関係技術職)
- 仕事をしていると、年月が流れるのがとても早く感じます。時間をみつけて、仕事以外でも充実した生活を送りたいです。(事務職)
- 毎月の給料で生活をしていくことが、けっこう大変です。(技能職)
- 将来がとても不安。給料が欲しいけれど、それ相応の働きはしていないと自分で思う。(販売職)

こうしたなかで、転職を考え始めているのだが、なかなか決断できないという記述も散見される。また、仕事だけではなく、生きていることさえ辛くて仕方ないという状態になっている回答者も存在する。

- 自分の希望する仕事につきたいと、いろいろ手段を考えたが、車のローンの支払いや生活していく為に、収入を使っていると、もしやめた時、生活していく事が、出来なくなると思い、やめられないでいる。これでいいのだろうか？　自分もどうしていったら良い方向に行くのか、わからない。(職種無回答)
- 仕事をしているとつらい事ばかりで、選ぶ時に「ここならいいのではないか」とすすめられて決めたが、やはり自分で決めればよかったと後悔している。転職したいと考えているが、上司に相談したら「今辞められたら困る」と言われ辞められなかった。これからはどんな事でも最終的決断は自分でしたい。(事務職)
- 人との接し方について深く考えさせられた。自分は社会人として仕事とプライベートをしっか

りわけるべきだと感じた。（中略）上司は部下がどんな仕事をしているのか、ちゃんと理解してほしいと思った。尊敬できる人に上司になってほしい。仕事をやめたいと何度も思ったが、結局やめても働き口がみつかるか不安でやめられなかった。（事務職）

- 他人とは解り合えない／組織は個性を台無しにする／収入が少なすぎて、一人暮らしするには不安が泥の様にこびりついて離れない／家族ともつまるとこ、他人同士だ／早く死にたい（技能職）

3.2.2　正社員・公務員への転職者

正社員や公務員の継続就業者は、それぞれ多様な経験と感想をもっていることをみた。それでは、高卒後に就業状態の変更はあったが、１年半が経過した時点で正社員や公務員として就業している場合、その状況をどのように感じているだろうか。こうした経験をもつ回答者は少ないが、記述にはいくつかの典型例があらわれており、確認しておく価値はあるだろう。

- 高校卒業して、長くフリーター生活をつづけてきたけどやはり定職についた方がいいと思った。金銭面や社会的に見てもいいと思うし。だから今のフリーターやニートの人はできるなら定職についた方がいいと思う。（運輸）
- 正社員として、働きはじめると、１日が大変短く感じるようになった。（サービス職）
- 私は、１年間の間ほとんどを、事務を希望職種として、探してきました。商業高校を卒業し、事務職に関する資格をたくさん取ったので、何の疑問もなく、その事務職を希望としました。しかし、アルバイトで、何社か経験させて頂きましたが、私にとって事務という職業は、毎日変化がなく、何か物足りなさを感じて、長続きしませんでした。そして、今年（'05）の２月から販売員として（正社員）働き始めて、楽しさも、忙しくて苦しいところもたくさん経験できて、大変充実した日々を送っております!!　自分ではわからない自分を見つけることができたと思っております。何でもやってみることはいいことだと思いました。（販売職）

近年のフリーター・ニートの増加の原因を、若者の職業意識の未成熟に求める立場からは、できるだけ早期に「やりたいこと」を見つけることが重要だとされている。事実、子どもの頃に希望していた職業があった人ほど、成人してからやりがいのある仕事に就いた経験をもつ。けれども、重要なのは、その希望をそのまま実現することではなく、修正しながら「自分の（やり続けられる）やりたいこと」を見つけていく過程なのである（玄田編、2006）。職業教育の場などでは、「やりたいこと」を見つけるだけでは不十分であることを、いくら強調しても強調しすぎることはないだろう。

3.2.3　非正社員への転職者・非正社員の継続者

転職や学校を中退して非正社員になった場合、および非正社員を継続している場合は、その状況に対して、どのように感じているのだろうか。転職および学校中退をして非正社員となっているのは25名、非正社員を継続しているのは10名である。実は、このグループでは第１次追跡調査からの連続回答者が、それぞれ２名しかなく、ほとんどが新規の回答者である。非正社員に転職したり非正社員の状態が続いていたりすると、調査の回答が難しくなる要因があるのかもしれない。なお、学校中退から非正社員へのグループに分類される25名には１年制の専門学校を修了したケースが含まれるが、ここでは省略する。

まず、非正社員への転職者からみていこう。

- あせらずゆっくりと自分と向き合うことがとても大切だと分かった。むりせず、ニートでもフリーターでも、いつかやりたい事ができて胸を張れるようになれればいいと思う。（スーパーマーケット）
- 転職してみて、楽な仕事は無いと思った。また、次の仕事はすぐ見つかると思い辞めたが再就職するのに半年かかった。仕事を探している人は大勢いるので倍率が高くて決まりづらかった。（事務職）
- 職につくのは大事だとは思うがつく職にもよると思う。その職に受ける印象と自分の経験は次につながるととても思った。（販売職）
- 色々な仕事をして自分に合う職種を選びたいとも思うが、不況なのであまり職を離れたくないと思います。将来結婚して子供を産みたいので、今の内に貯金をして資金にしたいと思うが、なかなか思い通りに貯まらないので、親を改めて尊敬する。（製造業）

高卒後に通学経験のある回答者は、次のように記述している。厳しい家計状況によって進路変更を余儀なくされるなど、必ずしも「若者のわがまま」とはいえない回答が散見される。しかし、たとえ「わがまま」であっても、雇用情勢によっては正社員になるのが容易だった時期も存在する。世代による違いを、若者たちだけの責任としていいのだろうか。

- この１年は専門学校をやめ、自分の夢のことを考え、働くことになりました。その中で働くことの大変さ、お金の大切さ、人との付き合い方など色々なことが学べた１年でした。（スイミングスクールのインストラクター）
- 大学を途中でやめてしまい、親には申し訳ないと思いつつ、家の経済状態がとても悪かったので、（今も）、親からの仕送りに頼らず、生活費の全てをアルバイト代でまかなうという生活になった。親がどんな思いで私の学費を払ってくれていたかと思うと、本当に申し訳ないとつくづく感じた。お金を稼ぐことの大変さがよく分かった。（サービス職）
- 漠然と専門学校（公務員の学校）に入学したものの、１次試験しか合格できずに今に至ります。／公務員は安定しているという面にだけ着目し、やりがいや使命を本当に理解していなかったと思います。／今は「フリーター」となっていますが、「建築」「不動産」の勉強をしているので、近い将来、「正社員」として働きたいと思っています。（販売職）

最後に、非正社員の継続者についてみることにしよう。先にもみたように、非正社員内部での移動は少なくない。現実には、数ヶ月単位で短期のアルバイトを繰り返すなど、より多くの移動を経験している可能性がある。この点をふまえながら、記述をみていくことにしたい。

- 仕事で色々嫌なことがあったけど、その経験を通して、自分のためになったことがあるのでよかったなと、思います。（サービス職）
- 人と接する事も多くなって人と接する事が好きになった。（販売職）
- 精神的にだるい／気をつかう／あまり上手く会話が出来なくなった／友人との話は楽しいけど上手く会話できない／イライラすることが（ストレス）多い。（技能職）

非正社員を継続しているからといって、その経験は一様ではない。自分が成長した実感を明

らかにもっている回答者もいる一方で、まったくその実感をもてない回答者もいる。高卒後の正社員就職を半年たたずに離職してコンビニでアルバイト店員として働き、「アルバイトで生活するのはむずかしいと思った。車を買うと本当に余裕がなくなると思った」と記入した回答者は、第２次追跡調査では、次のように成長のあとがみられる回答をしている。

・ 言葉遣いをあらためて知りました。仕事をしてお金を貯めて１人暮らしをしてみたいと思いました。（販売職）

また、非正社員のままではあっても、次のような経験をしている回答者もいる。

・ 高校３年生の後期から始めていたアルバイトで、オーナーに認められ、雇用保険に加入できるパートにしてもらったのだけれど、本当は今の職場をやめて、正社員として工場で働くことになっていました。工場の仕事は希望する職種ではないけれどやっぱり正社員として働きたいという気持ちが大きかったのです。でも、今の職場は人間関係がとてもよくて、私を必要としてくれています。すごく、すごく悩んだのですが、必要とされるってすごく嬉しくて、責任も重くなるけど、幸せな事でした。高校の時はイイ加減な事ばかりしていましたが、人に必要とされることの喜びを知って、今は責任をもって仕事したいと思っています。（経理・事務を含む接客業）

仕事に、そして毎日の生活に前向きになれるか否かは、正社員か非正社員かという違いによって生じるのではない。近年の高卒者では、正社員で就職しても、非正社員で就職しても、その労働環境は連続的であり、とくに勤続３年以内では、きわめて似通ったものになっているだろう。だからこそ、個々の職場で若者たちをきちんと受け入れ、本人たちが成長を実感できるような機会を与え、人間関係を築いていくことが重要になる。

４．第３次追跡調査データから

4.1　高卒から２年半の就業経験

本節では、高卒後２年半が経過した2006年秋に実施した第３次追跡調査において「何らかの職業に就いている」としてＡ票に回答した高卒就職者を中心としてみていく。第３次追跡調査Ａ票の回答者は195名いるが、それまでの回答状況などから高卒後すぐに就労したことが判明するのは57名、１年制の学校を卒業したか、または短大や２年制の専門学校を中退して就職した回答者８名、2006年春に新規学卒として就職した回答者121名、経路不明９名となっている。

こうした事情から、第３次追跡調査Ａ票の195名の回答者のうち、第１次追跡調査と重なる回答者は36名、第２次追跡調査と重なる回答者は59名となっている。第１次追跡調査と重なる36名について第１次追跡調査時点と第３次追跡調査時点との就業状況を比較すると、正社員継続22名、公務員継続６名、非正社員継続６名、その他→非正社員２名である。第３次追跡調査については公務員も正社員に含めているが、77%が正社員・公務員の継続者であり、就業状況に変更があった場合の回答は少ないようである。

同様に、第２次追跡調査と重なる59名についてみると、正社員継続34名、公務員継続８名、非正社員継続９名、正社員→非正社員３名、公務員→非正社員１名、非正社員→正社員４名となっており、やはり71%が正社員・公務員の継続者であることがわかる。

ここでは、第３次追跡調査で新たに回答し、かつ高卒で就職していることが明らかな回答者

と第２次および第３次追跡調査双方の回答者の計 64 名（男性 20 名、女性 38 名、不明６名）について、高卒後３年目までの就業経験をみていこう。

まず、64 名全体について 2006 年秋現在の就業状況をみると、次のようになっている。（　）内は人数である。

正社員 64%（41）、公務員 14%（９）、非正社員 20%（13）、その他２%（１）

2005 年秋に実施した第２次追跡調査と比較すると、正社員が 10 ポイントほど増加しており、ここからも非正社員の回答が少なくなっているといえるだろう。

現職の開始時期によって転職の有無をみると、正社員 41 名のうち 32 名が高卒直後の 2004 年から継続しているのに対して、非正社員では 13 名のうち８名が 2006 年からの就業となっている。

4.2　高卒後２年半の経験――自由記述から

4.2.1　正社員･公務員の就業者

2006 年秋の調査時点で正社員や公務員に就いている回答者は、ほとんどが継続就業者である。就職して３年目を迎えた彼ら／彼女らは、どのような感想を抱いているのだろうか。

- 仕事はもうなんでもこなせるようになったが、このまま同じことの繰り返しでいいのかとよく考えます。自分には他にも色々できることがないのか自分探しをしているところです。（事務職）
- 高校卒業時に「この仕事したい」「この会社がいい」と思っていても世の中を知るにつれて（私は３年目になりますが）他が良いと思ったり、選択をまちがえたかなーって思ったりすることがあります。（事務職）
- 人間関係や、初めて経験する仕事内容など、毎日、刺激のある日々ですが、本当に自分がやりたい職はちがうものだと感じています。（販売職）

以上は、仕事に慣れるにつれて、このままでいいのかと疑問を持つようになってきた回答である[7]。３番目の回答は、１年前に「環境に恵まれて、上司や周囲の人々の影響もあって今の仕事をやめようとは思わないが、自分の可能性を試してみたい」と回答した女性である。仕事に疑問を抱くようになると、もっと勉強しておけばよかったと感じるケースもある。

- どれだけがんばっても仕事をしていても認めてもらえないやるせなさ。けど、今の仕事内容に不満はない。会社の組織に不満がある。学生の時にいろいろな資格をもっていれば（とっていれば）よかった。専門学校にも行ってみたいと思う。（事務職）
- 生活費をかせげれば、ある程度どんな仕事でもよいと思っていました。でも、やりがいを持って仕事に取りくむには、自分の好きな仕事につくのが一番だと感じました。そのためには、やはり学校に行く方がよいと思います。（事務職）

一方、経験を重ねることで、仕事に対して、より積極的になっている例もある。やはり、職場での教育訓練の豊富さが、こうした姿勢に結びついているのではないだろうか。

- 仕事の他にも、講習会などにも参加し、資格取得などもしたので頑張ったと思います。（技能職）
- たった１mmのズレでも、ズレはズレだから見逃さずに、報告すること。商品になるんだから、あらためて、正確に組み付けをしないといけないと思った。（技能職）

- 入社した時からの念願だった駅員から車掌になる事が出来ました。只今見習い中ですが、公共性が強く、お客様の安全を守るやりがいのある仕事なので私にとって最高の職場です。気を引き締めて一生懸命がんばって行きたいです
- 後輩がはいってくるようになり先輩としての責任を感じるようになった。（公務員）

また、思い切って転職したことを報告してくれた回答者もある。高卒３年目になると、１年目の離職とは異なり、積極的な理由による離職・転職が生じるようである。以下の２例はどちらも正社員からの転職であるが、それなりに意欲をもって働くなかで自分自身の適性を見いだし、進路を修正した結果だと考えられる[8]。

- 私は１０月から転職しました。以前はホテル・旅館業を高卒後２年半勤めていましたが、少しもの足りなさを感じていました。生活も不規則で休みもまばら。一生出来る仕事ではないと日頃感じていました。高校時代、必死で取得した資格もあまり生かせず、会社に振り回されている、と実感しました。重役と肩を並べた仕事をしつつも、途中でエプロンを着け仲居をしなければならない、お金を数えている途中でも電話をとらなくてはならないし、ときにはそのまま接客のために席を離れることも…なんて杜撰な体形。私はなんでもやさんじゃないと思って税理士事務所へ転職しました。今度は専門知識を学び、私にしか出来ない仕事、会社を動かす立場を目指します。（事務職）
- 高校卒業後に就職した企業を退職して、別の企業に転職したが、自分が好きなものに関っていると仕事も楽しくてヤル気が出る。思いきって転職して良かった。（事務職）

4.2.2　非正社員就業者

本節でみている高卒就職者のうち 13 名の非正社員のうち、自由記述に回答しているのは７名にすぎない。典型的な意見とはいえないが、仕事に関連した記述をみていこう。

- 自立した人になるには遠く、生きていくことは大変だと感じた。（サービス職）
- 社会人としての責任感。熱があっても、インフルエンザにかかっても一日も休めない。残業はあたり前。自分の仕事が終わってなかったらＰＭ１２：００まで残る、などです。（販売職）
- 自立してみて、お金を得る事の大変さ、尊さを学びました。親に扶養してもらう立場にあった自分が、今度は家庭を持って扶養できる存在になりたいと改めて感じ学びました。（情報関係）
- 大人ってズルイ。なんだか、ごまかされている気がする。自分が精神年齢が低いのはわかっているけれど、かなりガキあつかいされているような気がする。（職種無回答）
- だるい／会社の人と話すのが面倒くさい／給料上げてほしい／上司は自分で作業しないくせに、人に無理な要求をする時があるから腹が立つ／作業台を二台で動かすのがもういやだ。一人作業に戻りたい／最近友人と遊べないからつまらない／眠い／ペアの人とうまくいかなくなってきた。（技能職）

２年目のように非正社員であっても豊かな経験を与えられているという記述は、ほとんどみられない。20 歳にして、すでに老いてしまったかのような記述が印象的である。３年間近く非正社員として働いている場合、繰り返す職探しなどもあって、疲労が蓄積しているのだろうか。